

浅口市竹林寺天文台遺跡の確認調査－岡山県南西部の弥生集落－

小林利晴

1 地理的歴史的環境

今回、ここに報告するのは、平成15年に岡山県教育委員会が、国立天文台岡山天体物理観測所新望遠鏡施設建設に伴って実施した、竹林寺天文台遺跡確認調査の成果である。この遺跡は標高372mの竹林寺山山頂付近に位置し、埋蔵文化財包蔵地として周知されている範囲の大半は現在、自然科学研究機構国立天文台岡山天体物理観測所（以後、国立天文台と呼ぶ）の敷地内にある。天文台が存在することからも分かるとおり、遺跡は平地からの比高差が約300mもある高所に位置し、東に標高405mの遙照山、西に標高364mの阿部山などが連なる遙照山山地の一画を占める。この山頂は現在、北側の小田郡矢掛町と南側の浅口市との境界となっており、かつても備中国小田郡と浅口郡の郡境をなしていた。北側の矢掛町では、西から東に向けて流れる小田川に沿って旧山陽道が走っていた。南側の浅口市では現在、山陽新幹線や山陽自動車道、国道2号線などの幹線道路が東西に走っている。遺跡地の眺望はよく、南は瀬戸内海を越えて四国、東は岡山市、西は広島県福山市、北は吉備高原の山々が一望に見渡せる。

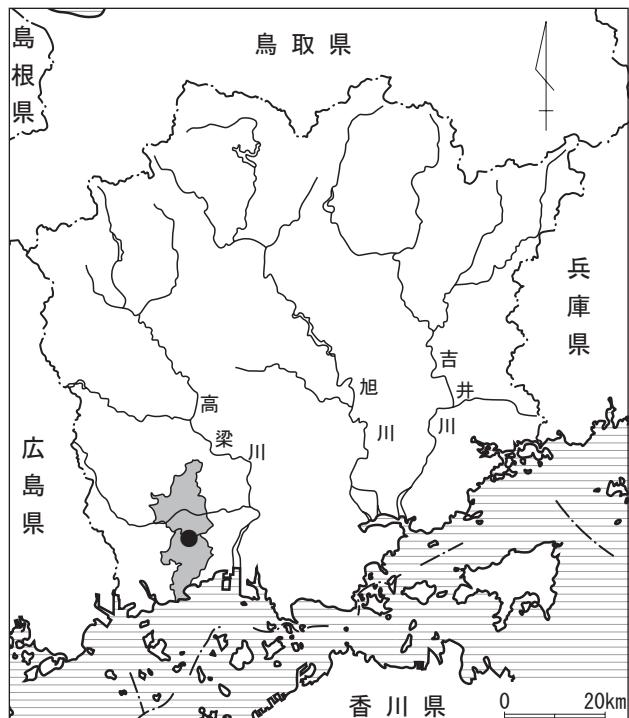
高所であるにも関わらず、竹林寺山周辺ではかねてから遺跡の所在が知られていた。阿部山付近では、弥生時代の土器・石器のほか、銅鏡も出土している。また遙照山山頂付近は寺跡として周知されている。今回の調査地点である竹林寺山山頂付近においても、クーテ型太陽望遠鏡施設建設（後述する第2地点のすぐ南側）に際して箱式石棺が見つかり、弥生時代の土器・石器も出土している。第3・4図に示したのはこの時の出土遺物である⁽¹⁾。1～3は弥生時代中期、4～12は弥生後期前葉の土器である。このうち10の鉢は、他の土器と胎土に違いがあり、備後産の可能性があるという⁽²⁾。13～19は弥生後期後葉の土器である。18の鉢と19の壺は、土器棺として用いられていた可能性がある。S1・2は石包丁で、S3は楔か。S4はスクレーパーである。また、山頂東側に横穴式石室が現存するほか、山頂から下った尾

根筋にも多くの遺跡が存在している。北側の矢掛町では、地蔵岩付近で弥生時代中期の土器が見つかっている。さらに下った裾野付近には、圃場整備に伴い確認調査が行われた神之脇遺跡と上山遺跡があり、前者からは弥生時代中期の堅穴住居が確認された⁽³⁾。南側の浅口市では、地蔵峠付近や竹林寺山南の中腹で弥生時代の土器が見つかっている。段林遺跡、道面遺跡はかつて発掘調査が行われ、両遺跡とも弥生時代後期の堅穴住居が見つかった⁽⁴⁾。裾野にある和田遺跡では、旧石器や縄文土器が見つかっているほか、弥生時代後期の土坑墓群から特殊器台形土器・高杯などが出土して注目された⁽⁵⁾。さらに南側にある寄島山地の裾部には、弥生時代の遺跡として森山遺跡⁽⁶⁾、和田谷遺跡などの集落や城殿山遺跡⁽⁷⁾などの墳墓群が存在する。

2 調査の経緯と経過

（1）調査の経緯と経過

岡山県浅口市本庄に所在する国立天文台で、新望遠鏡



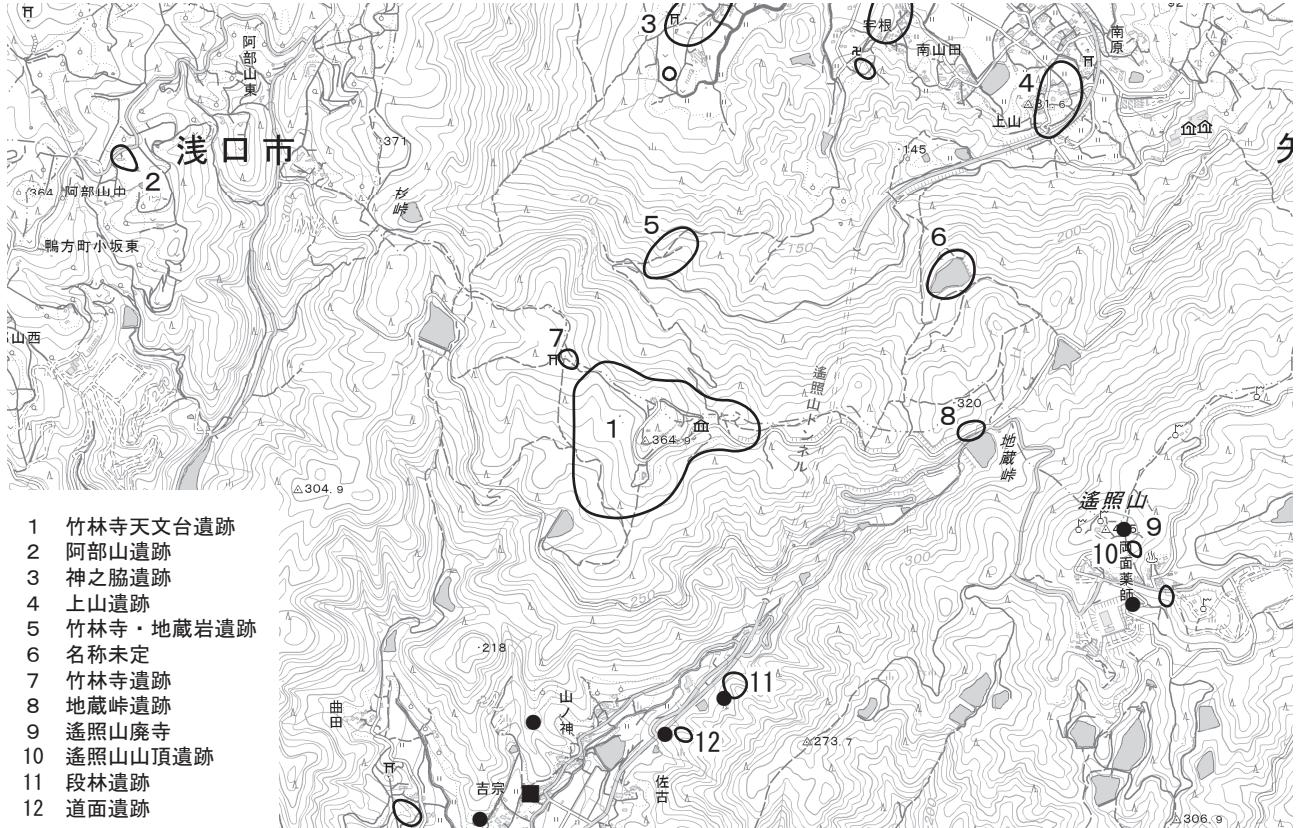
第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)

施設の建設が計画された。その敷地は全域が埋蔵文化財包蔵地として周知されていたため、平成13年から国立天文台と岡山県教育委員会の間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、平成15年度に岡山県教育委員会が確認調査を実施することとなった。なお、この確認調査に先立つ平成15年2月3日には、50cm反射望遠鏡施設の基礎工事に伴って、敷地内の急斜面地を事前に掘削し(5×5m)、遺構・遺物とも存在しない状況を確認している。

確認調査は、京都大学と広島大学が新望遠鏡を1基ずつ建設する予定であったため、その2か所について実施することとなった。調査地点は、現在188cm反射望遠鏡が建っている南側の緩斜面(以後、第1地点と呼ぶ)と65cmクーデ型太陽望遠鏡が建っている緩斜面(以後、第2地点と呼ぶ)で、調査期間は平成15年7月14日～28日、調査面積は195m²である。調査の結果、両地点とも弥生時代の竪穴住居をはじめとする遺構の広がりが判明し⁽⁸⁾、その成果をまとめた埋蔵文化財確認調査の報告を、平成15年8月7日付け、岡吉調第161号で提出した。こ

れにより、県教育委員会が両地点の本発掘調査を実施することが決まった。

ところが、広島大学は新望遠鏡の建設を変更したため計画が一時中止となり、京都大学も建設予定地を竹林寺山山頂の東尾根に変更した。京都大学の新しい建設予定地は、遺跡近接地であったため、平成17年に県教育委員会が試掘調査を行うこととなった。調査の結果、この地点においても弥生時代の遺構・遺物を確認し、遺跡範囲が東尾根まで広がることが判明した⁽⁹⁾。そのため県教育委員会が、新たに周知の範囲となった東尾根頂部について平成19年度に本発掘調査を実施することとなった。その後、新望遠鏡の建設計画は、事業主体が数回代わり、それに伴って発掘調査の実施機関も県教育委員会から浅口市教育委員会へ移るなど紆余曲折したが、その間の事情は『浅口市埋蔵文化財調査報告』2に詳しい⁽¹⁰⁾。本発掘調査は、浅口市教育委員会によって平成20年と平成27年の2度にわたり実施され、その調査報告書も同市教育委員会から2冊刊行されている⁽¹¹⁾。なお、京都大学の新望遠鏡は、平成30年に「せいめい」望遠鏡として完

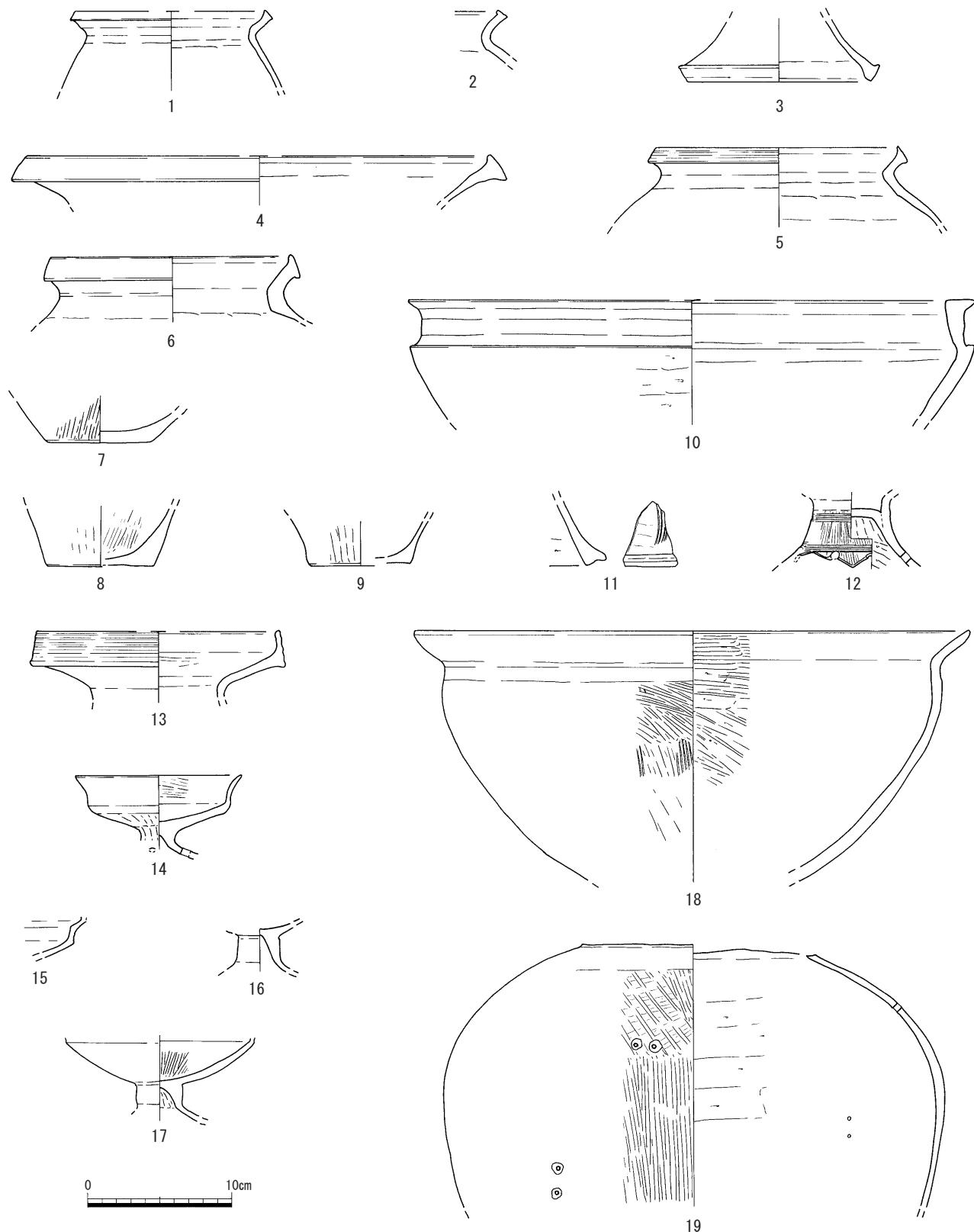


第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

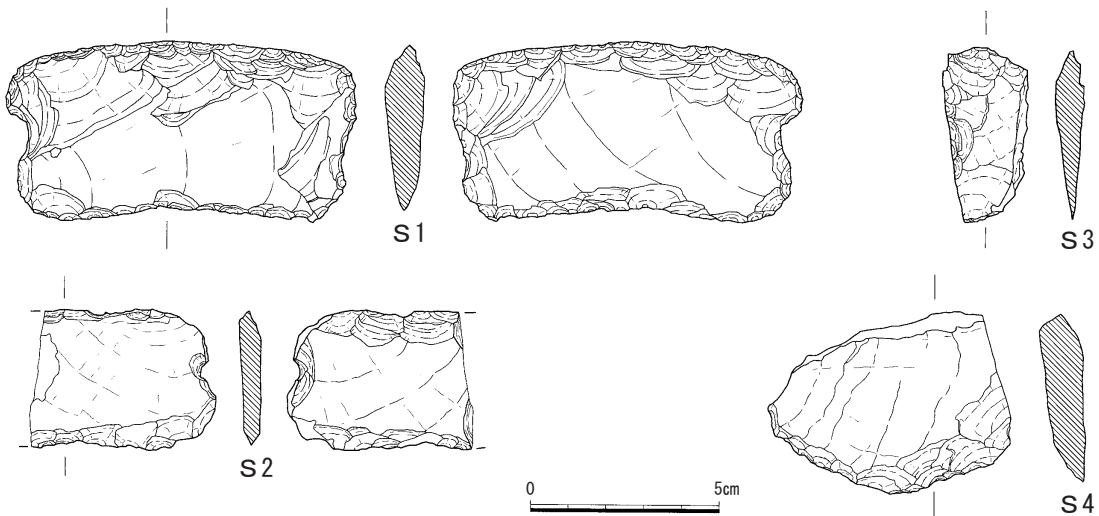
成した。

岡山県教育委員会が実施した平成17年度の確認調査成果については、その後、浅口市教育委員会が実施した

本発掘調査の成果とあわせて同市教育委員会により刊行された。しかし、平成15年度の確認調査成果については、本発掘調査が別地点で行われ、事業主体や調査機関も変



第3図 クーデ型太陽望遠鏡建設時出土遺物1（浅口市所有、1/4）



第4図 クーデ型太陽望遠鏡建設時出土遺物2（浅口市所有、1/3）

わったことから、未報告のままとなっていた。今回、ようやく報告の機会を得て、調査担当者としての責を果たす次第である。

（2）調査の体制

平成15年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

文化財課

課長 西山 猛

課長代理 田村 啓介

課長補佐（埋蔵文化財係長） 平井 泰男

古代吉備文化財センター

所長 正岡 瞳夫

次長 藤川 洋二

文化財保護参事 松本 和男

（総務課）

課長 中田 哲雄

課長補佐 笠本 弘忠

主任 小坂 文男

（調査第一課）

課長 岡田 博

課長補佐（第一係長） 光永 真一

文化財保護主事 小林 利晴（調査担当）

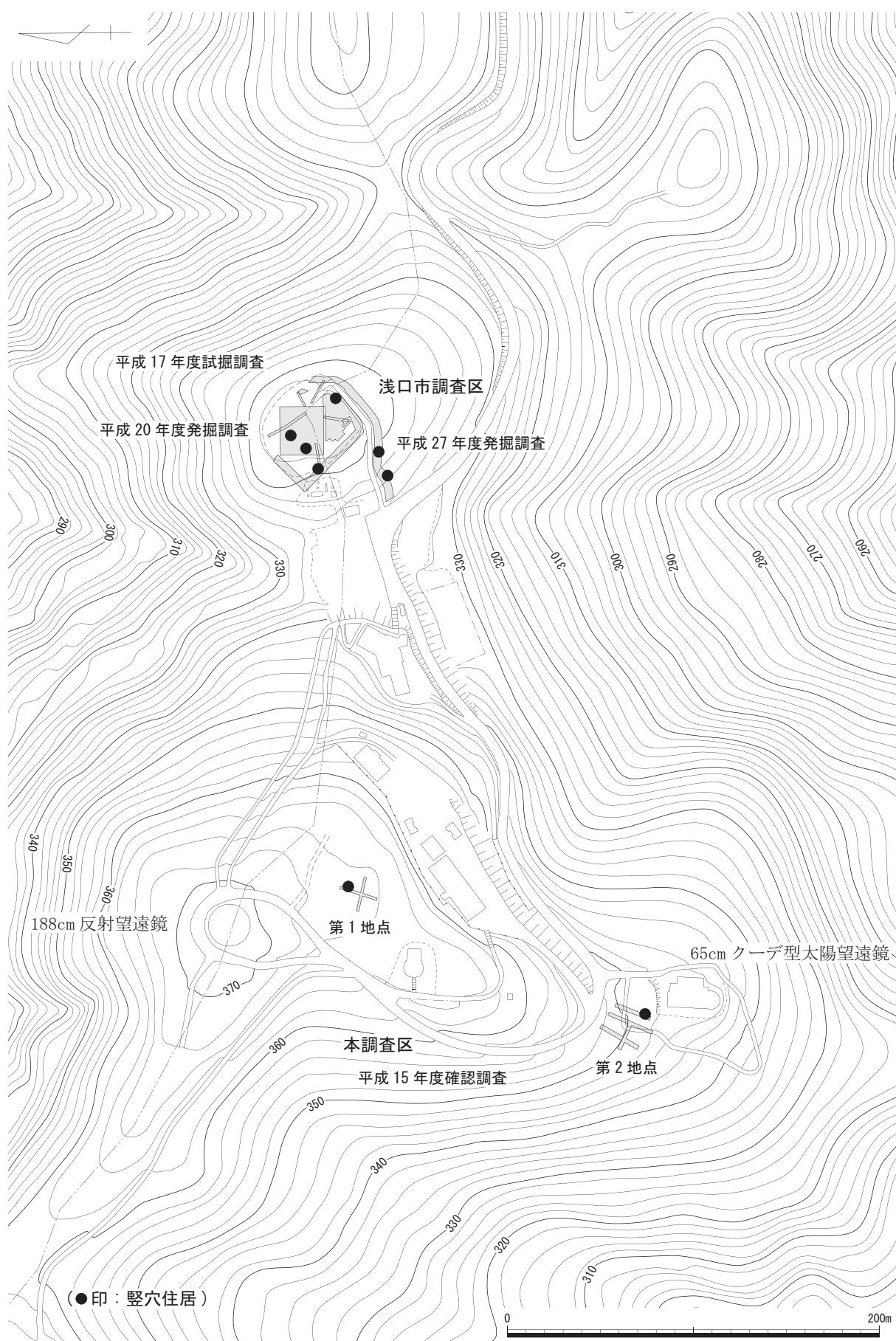
3 調査の概要

第1地点（第6・7図）

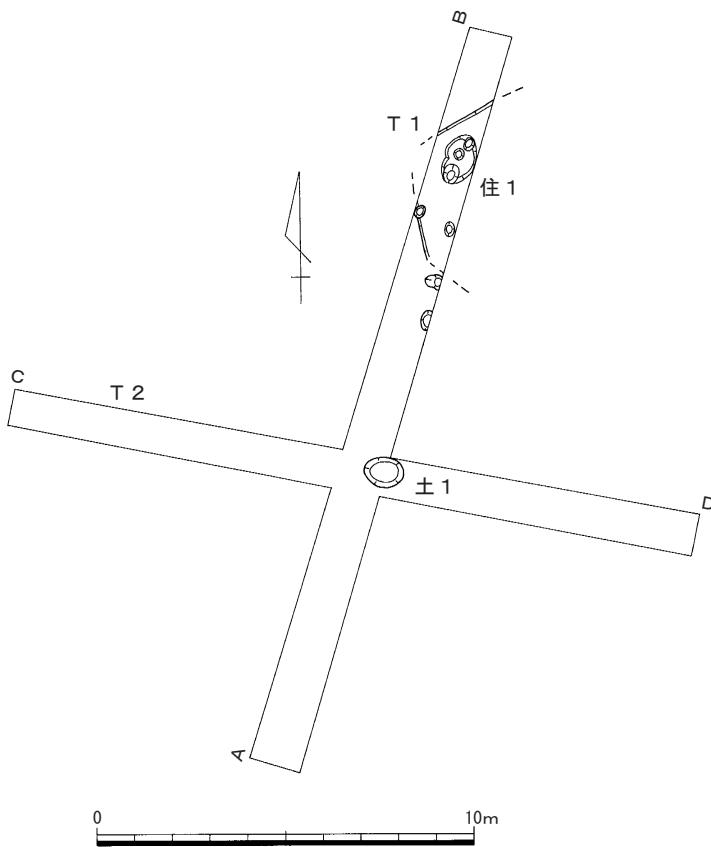
188cm反射望遠鏡の南側に広がる緩斜面に、長さ約20mのトレンチ2本（南北方向にT1、東西方向にT2）を十字に設定して調査を実施した。第1地点は、南北約100m、東西約50mを測る緩斜面の中央よりやや北側に位置する。T1・T2とも地表下20~30cmで明黄褐色の地山となるが、T1の北端は岩質基盤に変わる。検出した遺構には、T1の竪穴住居1軒、柱穴状遺構2基、T1とT2が交差する付近の土坑1基がある。また、T2の東側に弥生土器を出土する地点が存在した。これらは地山が岩質へ変わる付近にまとまっていた。遺物の大部分は竪穴住居1の覆土中から出土した。

第2地点（第8・9図）

クーデ型太陽望遠鏡の北西側に広がる緩斜面に、南北方向のT3（23×2m）・T4（27×2m）・T5（20×2m）、T4・T5と直交するT6（15×2m）のトレンチ4本を設定して調査を行った。この第2地点は、望遠鏡が建っている箇所も含めて南北約50m、東西約30mの範囲に広がる緩斜面の北西端に位置している。調査前は、標高350m付近ではほぼ平坦な地形を呈していた。しかし、T3~T5の北側は表土直下が地山となるのに對し南側は造成土が厚さ1~2mほど堆積することから、望遠鏡建設の際に北側を削平してその土を南側に盛ったことが判明した。そのため遺構は、造成土下に旧



第 5 図 竹林寺天文台遺跡調査位置図 (1/3,000)



第6図 第1地点遺構配置図 (1/200)

表土が残る南側に集中していた。検出した遺構には、T 3南側の竪穴住居1軒、T 5南側の溝1条、T 4・T 6の柱穴状遺構がある。

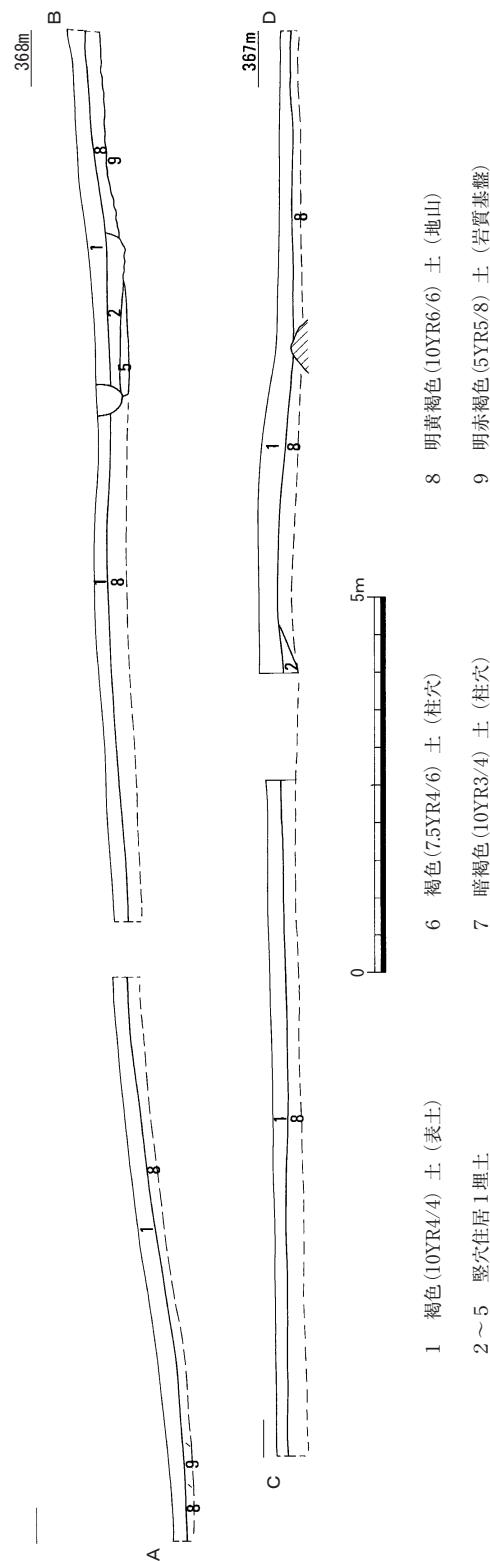
なお、平成15年に立会調査を行ったのは、第1地点と第2地点の間にある比較的傾斜の急な斜面地である。

竪穴住居1 (第10図)

第1地点のT 1の北側端付近で検出した竪穴住居で、全体の西側を調査したものと考えている。また、これに隣接して柱穴1基を検出した。

住居の規模は検出長458cmを測り、検出面からの深さは中央付近で約30cm、北端で約20cmある。床面は、海拔366.8m付近で水平となるが、岩質の基盤を掘り残した北側では10cmほど浅くなっている。多角形ないし不整形に復元される平面形は、岩盤の制約を受けた結果と考えられる。検出長から復元した床面積は推定で約18m²であり、竪穴住居2よりやや大きい。検出した5本の柱穴は、全てが平面円形を呈し、径35~40cmの規模である。深さは全て約40cmである。北側には浅い凹みが存在し、規模は幅約100cm、深さ約12cmを測る。

出土遺物のうち、図化したものは全て弥生土器である。



第7図 第1地点土層断面図 (1/100)

20は壺の口縁部で、外面に施した5条の凹線に3条の刻線を加える。21~24は甕で、口縁部21・23・24と底部22がある。21・23の口縁部外面には、数条の擬凹線が施される。25・26は高杯で、25は杯部と脚部の接合部に円盤充填が認められる。26は脚部であるが、施文、透かし孔などは見られない。これらの特徴は、弥生時代後

期前葉を示している。

竪穴住居 2 (第11図)

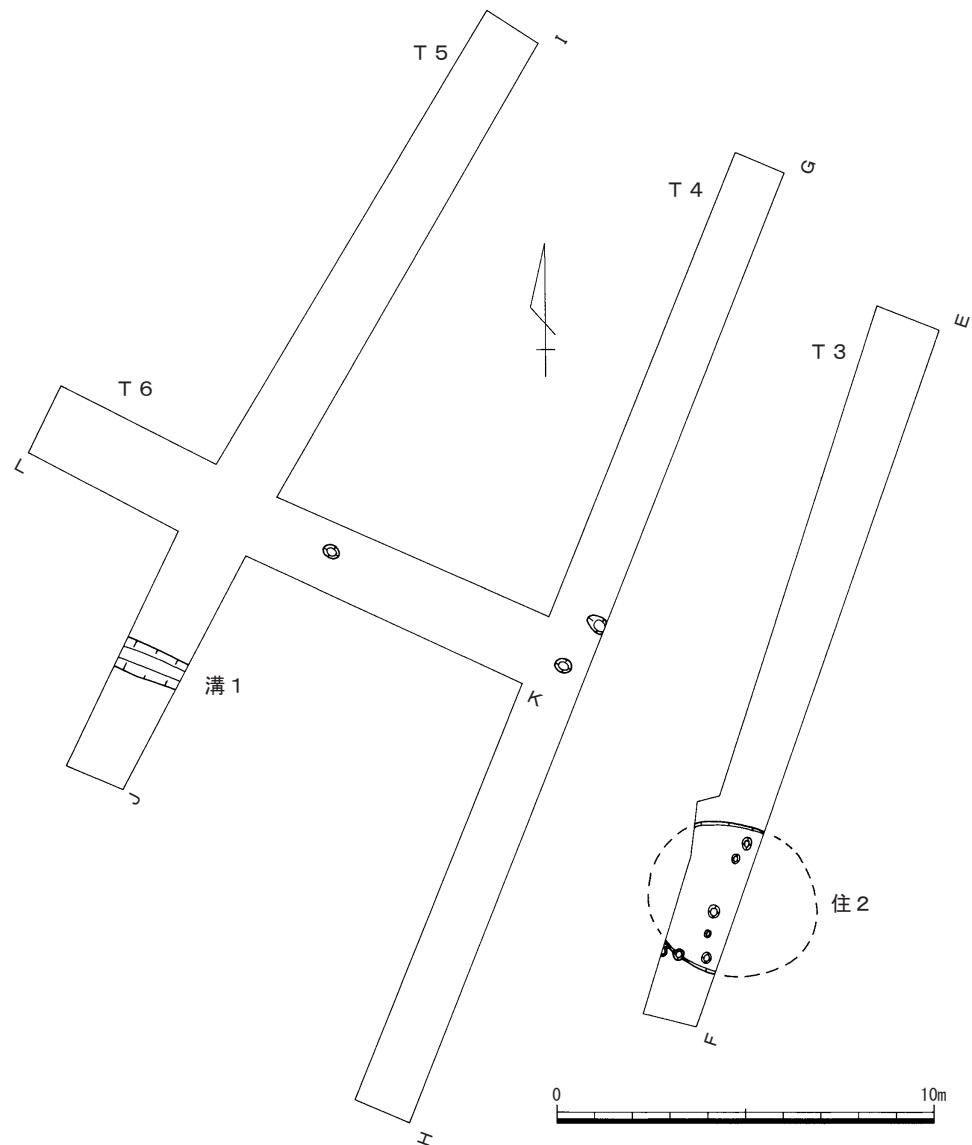
第2地点T 3の南端付近で検出した竪穴住居で、全形の中央西側部分を調査したものと考えている。周辺には他の遺構が存在しない。

住居の規模は、検出した最大長404cmで、検出面からの深さは35cmを測る。平面形は円形になることが予想され、検出長から復元した床面積は推定で約14m²である。床面は、海拔348.8m付近で水平となる。壁体溝などは見つかっていない。数本検出した柱穴は、全てが平面円形を呈し、径20~30cmの規模である。深さは全て20~30cmである。住居覆土の2層には、多量の炭化物が含まれており、焼失住居と考えられる。

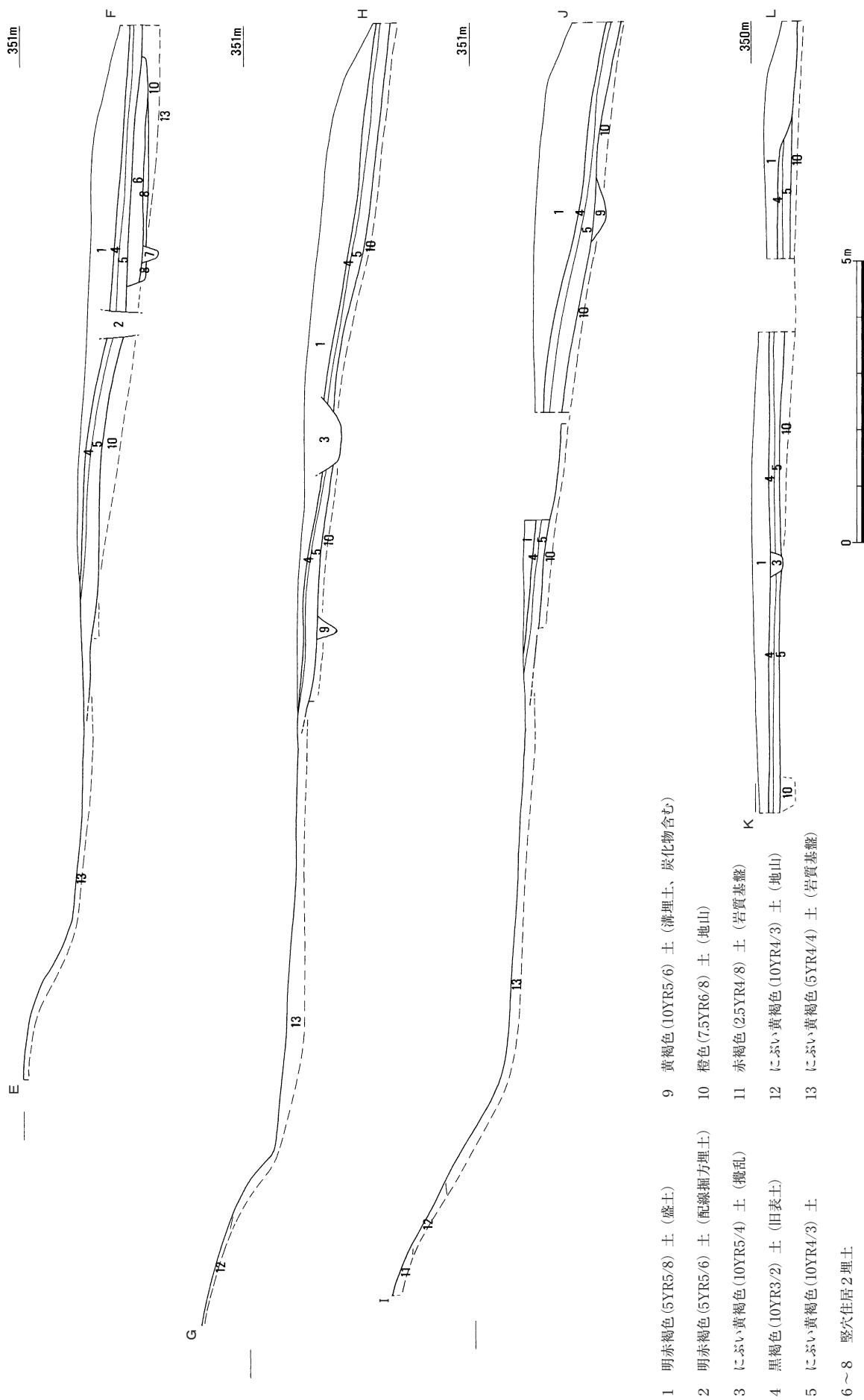
出土遺物には、以下のものがある。27~29は全て弥生土器である。27・28は壺口縁部、29は甕口縁部である。27の口縁は、外側に水平気味に広がり、端部に面を作る。28の口縁は、外側に短く広がり端部は丸く収まる。29の口縁部は、内傾する端部に数条の擬凹線を施す。これらの特徴は弥生時代後期前葉の様相を示しており、竪穴住居2は竪穴住居1と同時期になるが、やや先行する可能性がある。

土坑 1 (第12図)

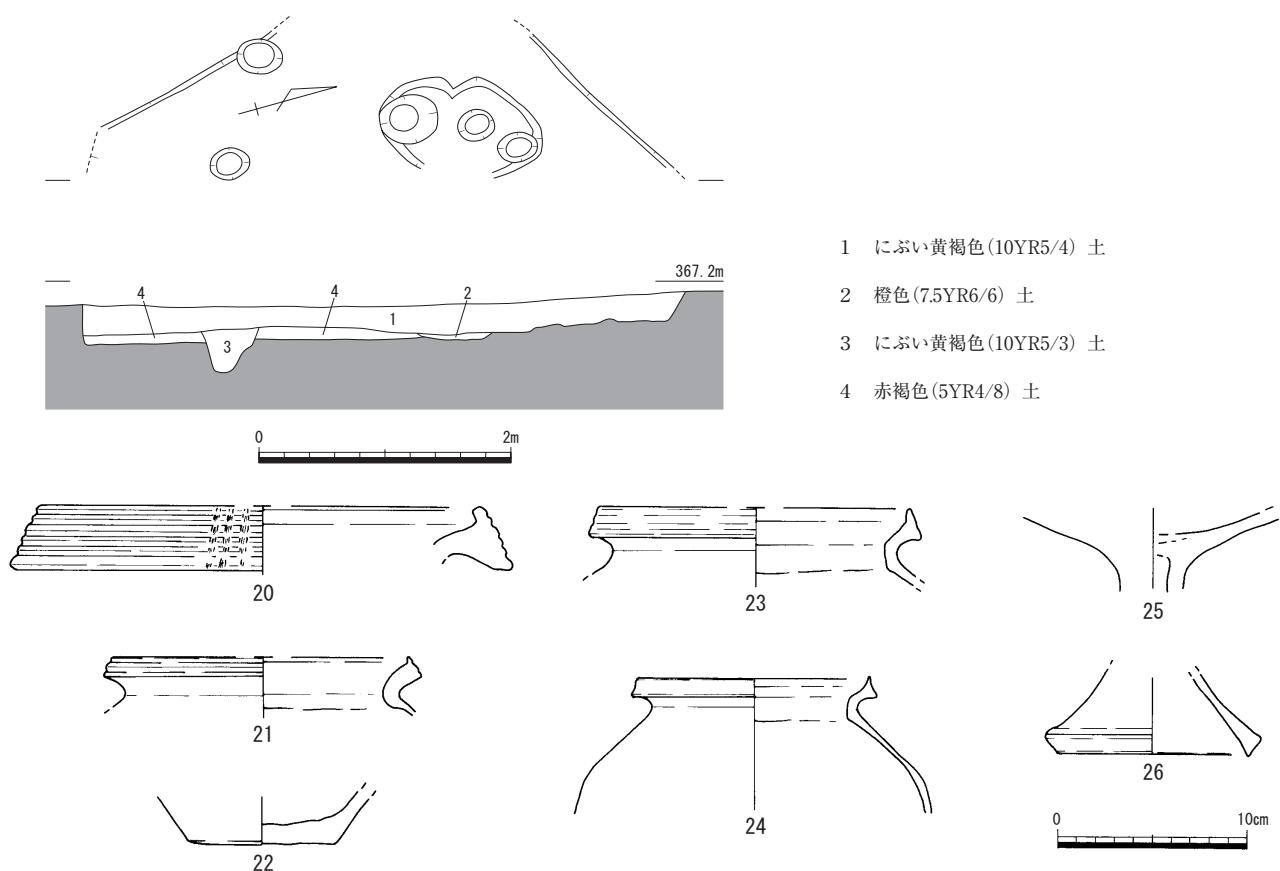
T 1とT 2が交わる箇所で検出した。規模は長軸長110cm、短軸長85cmで、平面は橢円形である。検出面からの深さは約20cmで、断面は皿形を呈する。出土遺物は存在しないが、覆土が竪穴住居1の1層と類似するため、



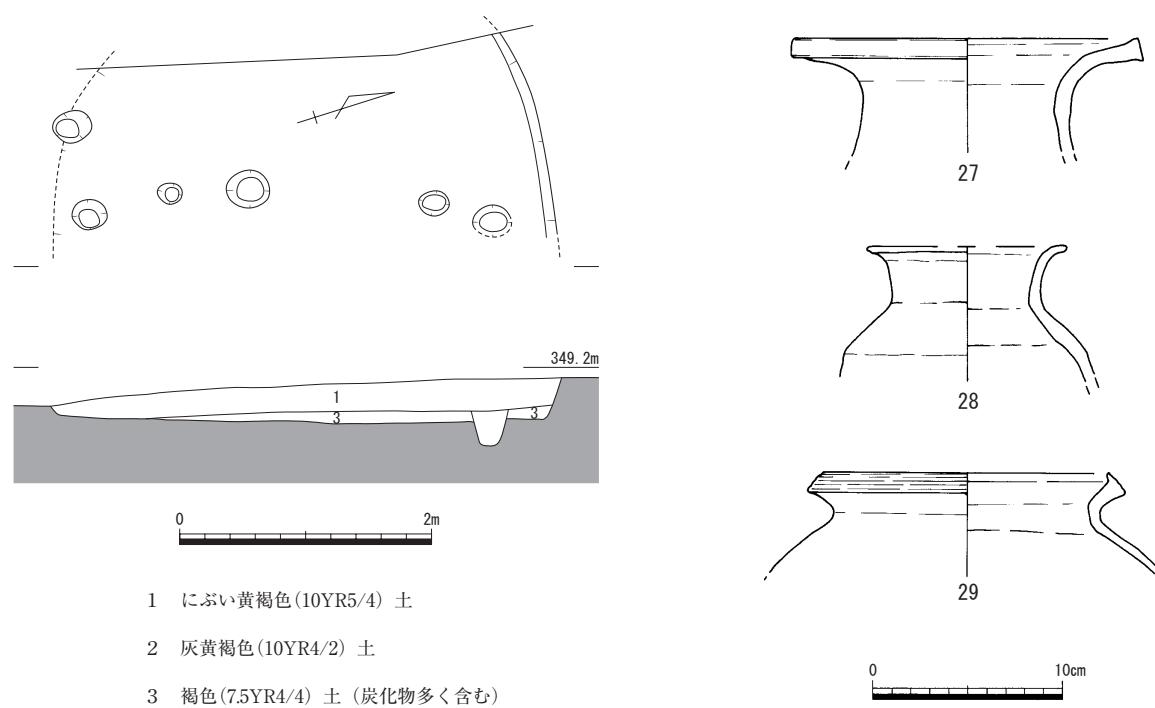
第8図 第2地点遺構配置図 (1/200)



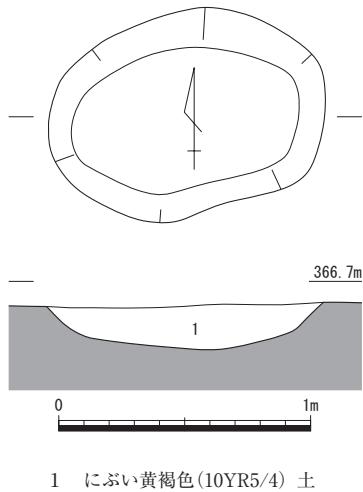
第9図 第2地点土層断面図 (1/100)



第10図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第11図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第12図 土坑1 (1/30)

この土坑も同時期と考えられる。

溝1 (第13図)

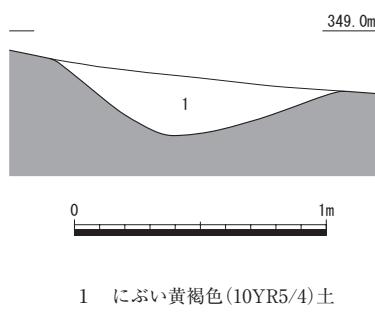
第2地点のT5の南側端付近で検出した。南東側から北西側方向に向けて流れているものと考えている。規模は、上面幅が110cmで、深さは約20cmである。断面は皿形を呈する。この溝は、東側のT4において検出されておらず、遺跡内をどのように走流するのか不明である。

遺物は出土していないが、覆土が竪穴住居2の1層と類似するため、同時期と推測される。

柱穴状遺構

第1地点では、柱穴と思われる遺構が2基見つかっている。2基ともT1の北側にあり、竪穴住居1の南側に近接している。2つとも規模は30~50cm前後で、深さは約20~30cmである。出土遺物は存在しないが覆土が竪穴住居1の1層を類似するため、どの柱穴も住居1と同一の時期になることが予想される。

第2地点では、柱穴と思われる遺構が3基見つかって



第13図 溝1 (東壁、1/30)

いる。T6中央付近とT4のT6が交わる付近の2ヶ所である。3基とも規模は20~30cm前後で、深さは約20cmである。遺物は存在しないが覆土が竪穴住居2の1層を類似するため、どの柱穴も住居2と同一の時期になることが予想される。

4 総括

竹林寺天文台遺跡は、本稿の調査地点（以後、本調査区と呼ぶ）と浅口市教育委員会の調査地点（以後、浅口市調査区と呼ぶ）を併せると、遙照山山頂部の2か所に営まれた弥生後期前葉・後葉の高地性集落と考えられる。2つの調査区から検出された遺構は、竪穴住居8軒・建物5棟、段状遺構1基・土坑164基・溝11条を数える。このうち竪穴住居は弥生後期前葉が4軒、後期後葉が5軒（重複あり）あり、掘立柱建物は時期が分かるものが後期後葉であるため、多くがその時期と推定できる。さらに本調査区の西側頂部でも弥生時代後期の高杯が表採されており、遺跡は山頂部に点在すると考えられる。またクーデ型太陽望遠鏡建設時に中期の土器も出土していることから、集落経営期間が遡る可能性もある。後期前葉の竪穴住居は、本調査区住居1などのように形がいびつで壁体溝を持たないなど構造が単純であり、柱穴も浅い。出土する土器は住居覆土のみで、遺構面上層に包含層が存在しておらず長期的な居住を考えたものではない可能性がある。これに比べ、後期後葉の竪穴住居は、平面形が整った円形であり、壁体溝が幾重にも巡っているものもあることから、建て替えが繰り返されたと考えられる。またこれらの竪穴住居には掘立柱建物の大半も付随していたと思われ、ある程度長期的な滞在を意図した集落であった可能性がある。竪穴住居が床面積を増していく傾向からも、地域の主要な集落の1つと考えて良いのではないか。

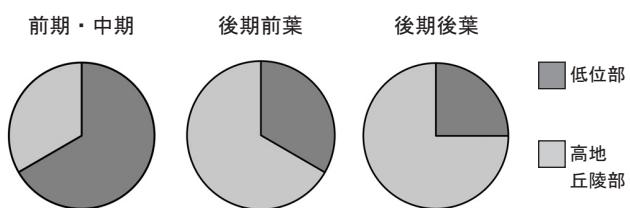
このような様相を、岡山県南西部、とりわけ高梁川以西（小田川流域付近）の集落遺跡と比較するとどうであろうか。この地域における集落遺跡の消長については、水田氏が詳しく述べている⁽¹²⁾。弥生時代前期の集落は、遺物の散布する箇所が少ないため、かなり限定的な存在であったと思われる。唯一の発掘調査例である矢掛町清水谷遺跡⁽¹³⁾は、小田川の氾濫原に営まれた環濠集落である。検出された竪穴住居の床面積は20m²以内に収まる

ものがほとんどである。低地に営まれる立地は、総社市南溝手遺跡、岡山市田益田中遺跡・津島遺跡・百間川沢田遺跡などと同じである。

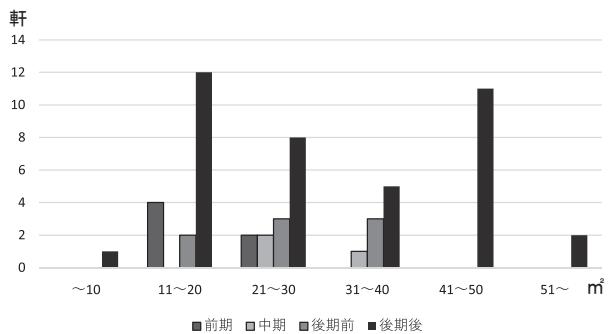
弥生時代中期の集落は調査例が少ないが、丘陵裾部などで土器が採集される箇所が多数あり、遺跡数は前期よりも増加したと思われる。発掘調査が行われた森山遺跡と神之脇遺跡では、竪穴住居の床面積が20m²前後となり、前期のものとあまり大差ないが、倉敷市蚊峰遺跡では約40m²のものもある⁽¹⁴⁾。

弥生時代後期前葉になると、竹林寺天文台遺跡や内平遺跡⁽¹⁵⁾のように高所に集落が数多く営まれ始める。岡山県南部に位置する足守川流域や砂川流域では、前段階の中期後葉に大規模な集落が丘陵上に営まれ、後期になると低地に移ることが指摘されているが⁽¹⁶⁾、この地域では、1段階遅れて高所に集落遺跡が営まれるようである。竹林寺天文台遺跡で検出された竪穴住居の床面積は20m²前後と推定されるが、この大きさは前期・中期の竪穴住居と大差ない。このように後期前葉の集落は、立地を除けば中期段階と違いがなく、その規模もそれほど大きくなかったことが考えられる。

弥生時代後期後葉になると、竹林寺天文台遺跡以外にも井原市高越遺跡⁽¹⁷⁾・五万原遺跡⁽¹⁸⁾、矢掛町中池ノ内遺跡⁽¹⁹⁾、倉敷市西山遺跡⁽²⁰⁾・蚊峰遺跡、浅口市段林遺跡・道面遺跡などの調査例がある。これらの遺跡の多くは高所や山腹に営まれているが、高所に位置する集落の比率は、弥生時代を通じて最も高く、7割を超える(第14図)。検出された竪穴住居の数は前時期より格段に増加し、床面積も40m²を超えるものが多数を占めるようになる(第15図)。それまでの集落とは、質・量とも違った様相が見られるのである。高越遺跡の調査を担当した高田氏は、「この地域の弥生時代中期から後期にかけての集落は、小規模なものが丘陵上に営まれるのが一般的」と述べた上で、同遺跡を「小規模な丘陵上の集落にも関



第14図 岡山県南西部集落遺跡の立地



第15図 岡山県南西部竪穴住居の面積

わらず有力な集団」と評価している⁽²¹⁾。ただ、この時期に丘陵裾部へ営まれた矢掛町白江遺跡⁽²²⁾では、竪穴住居こそ検出されていないものの多量の弥生後期土器が出土しており、大規模な集落遺跡の可能性もある。また、特殊器台を伴う弥生墳丘墓が複数存在する倉敷市真備地区では、調査例こそ丘陵にある遺跡しかないが、低地や丘陵裾部に集落遺跡が存在していてもおかしくない。このように全ての集落遺跡が高所にあるわけではないだろうが、高越遺跡のような主要な遺跡が多く存在していた。筆者は竹林寺天文台遺跡もこの時期、この地域における主要な集落遺跡の1つと考えている⁽²³⁾。

このように県南西部(特に小田川流域を見渡せる地域)の集落遺跡は、後期後葉になると急激に発展することが読み取れた。この時期、吉備の中枢地域(足守川流域と高梁川東岸)では楯築墳丘墓⁽²⁴⁾が築かれ、また立坂型の特殊壺・特殊器台(特殊器台の最初期型式)が各地で出土している。この遺物が出土する遺跡は、吉備中枢地域が最も多く、出雲地方がこれに次ぐ。県南西部地域では倉敷市黒宮大塚遺跡・黒宮大塚北方⁽²⁵⁾・立坂遺跡⁽²⁶⁾、矢掛町芋岡山遺跡⁽²⁷⁾、井原市高越遺跡・木之子長法寺⁽²⁸⁾などが知られているが、さらに西の備後にも出土例があって、その数は吉備中枢と出雲に次いで多い。特殊器台という遺物が、吉備中枢の勢力と関わりの深い地域にもたらされたと推定するならば、この地域は吉備中枢にとって重要な位置付けがなされていたと考えられよう。その最大の理由は、後の山陽道が象徴するように、交通の要衝であったことが考えられる。吉備の中枢を担った楯築墳丘墓、雲山鳥打墳丘墓⁽²⁹⁾などの有力首長は、瀬戸内海の水路や河川沿いの陸路を通じて各地との交流を展開していたものと考えられ、備後へと通じるこの地域の重要性も増していったものと思われる。ただし、立坂

型特殊器台は竹林寺山の北側（小田川流域）から出土していて、南側の地域に現れるのは次の向木見型（和田遺跡出土）からである。

竹林寺天文台遺跡は、後期前葉の頃までは小地域における短期間の集落だったかもしれないが、後期後葉になると交通の要衝を見渡す地域の主要な集落に発展したのであろう。

註

(1) 第3・4図は、クーデ型太陽望遠鏡施設建設時に見つか
り浅口市教育委員会が所有している遺物である。本報告に
関連が深い遺物であるため、同教育委員会から許可を得て
ここに掲載した。

(2) 河合忍氏の御教授による。

(3) 岡山県教育委員会「神之脇遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化
財発掘調査報告』169 2002年

神之脇遺跡で検出した溝2は、比較的低い位置で見つか
り、また底面が川原石を含む層であったため當時溝と判断
した。しかし底面付近が比較的水平だったことと、その箇
所に柱穴が見つかっている事実から、竪穴住居であった可
能性が高いと考えている。

(4) 岡山県教育委員会「段林遺跡・段林古墳」『岡山県埋蔵
文化財発掘調査報告』132 1998年

岡山県教育委員会「道面遺跡・塚地古墳」『岡山県埋蔵文
化財発掘調査報告』147 1999年

(5) 岡山県教育委員会「山陽自動車道建設に伴う発掘調査2」
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981年

(6) 浅口市教育委員会「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘
調査報告』1 2008年

(7) 2022年3月に刊行予定である。

(8) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』34 2004年

(9) 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』36 2006年

(10) 浅口市教育委員会「竹林寺天文台遺跡2」『浅口市埋蔵
文化財発掘調査報告』3 2016年

(11) a 浅口市教育委員会「竹林寺天文台遺跡」『浅口市埋
蔵文化財発掘調査報告』2 2009年

b 註10文献

(12) 註11a文献

(13) 矢掛町教育委員会「清水谷遺跡」『矢掛町埋蔵文化財發
掘調査報告』1 2001年

(14) 真備町教育委員会「蚊峰遺跡」『真備町埋蔵文化財発掘
調査報告』1 1999年

(15) 岡山県教育委員会「内平遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』
22 1992年
岡山県教育委員会「内平遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』
26 1996年

(16) 平井勝「岡山における弥生時代のムラとクニー投馬国か
ら吉備国へー」『古代吉備』第21・23集 1999年・2001年
宇垣匡雅「吉備弥生社会の諸問題」『論争 吉備』考古学
研究会岡山例会シンポジウム記録1 考古学研究会 1999
年

重根弘和「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海
の考古学』 古代吉備研究会 2002年

河合忍「吉備弥生社会の特質を考える-墓・集落の検討か
ら-」『弥生墓が語る吉備』考古学研究会岡山例会シンポジ
ウム記録9 考古学研究会 2013年

(17) 井原市教育委員会「高越遺跡」『井原市埋蔵文化財発掘
調査報告』2 2004年

(18) 財団法人倉敷考古館「岡山県美星町五万原遺跡」『倉敷
考古館研究集報』第5号 1968年

(19) 岡山県教育委員会「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財
発掘調査報告』108 1996年

(20) 真備町教育委員会「西山遺跡」 1979年

(21) 註17文献

(22) 財団法人倉敷考古館「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考
古館研究集報』第1号 1966年

(23) 本遺跡に近く弥生後期後葉の時期になる段林遺跡は、一
つの尾根上全てを発掘調査したが竪穴住居が1軒のみしか
検出されなかった。その事実と比較して、本遺跡評価の根
拠の1つとした。

(24) 桁築刊行会『桁築弥生墳丘墓の研究』 1992年

(25) 財団法人倉敷考古館「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉
敷考古館研究集報』第13号 1977年

(26) 総社市文化振興財団『新本立坂』 1996年

(27) 財団法人倉敷考古館「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」
『倉敷考古館研究集報』第3号 1967年

(28) 財団法人倉敷考古館「岡山県井原市木之子町長法寺出土
の壺」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967年

(29) 岡山県『岡山県史』第十八巻考古資料 岡山県史編纂委
員会 1986年